埋蔵文化財 愛知

No. 20

松　河　戸　遺　跡　（6ページに関連記事掲載）

シリーズ「条里制」を探る

三 河 国 の 条 里 地 割

愛知県の東部をしめる旧三河国は、大きく矢作川流域の西三河地方と豊川流域から渥美半島にかけての東三河地方とに分けられる。律令制下で国府が置かれたのは東三河の宝飯郡である。宝飯郡とはいうもののその位置は、東西を分ける三河山地を横断する旧東海道の東出口にあたり、ある意味では三河国域の中心とみることもできる。ちなみに矢作川水系がもと参河国で、豊川水系（宝飯郡）はもと穂国であって、国府を穂国に設置するかわりに国名を参河国としたとみる考え方もみられる。

条里地割の分布

現在迄のところ地籍図の検討等から条里地割の存在が知られるのは次の22箇所である。

加茂郡　①豊田市小坂本町周辺　②豊田市梅坪町　③豊田市市木町

碧海郡　④矢作川右岸の旧矢作町～旧安城町にかけての地域

額田郡　⑤岡崎市大樹寺町周辺　⑥岡崎市戸崎町

幡豆郡　⑦幡豆町西幡豆および鳥羽

宝飯郡　⑧蒲郡市蒲郡及び竹谷附近　⑨豊川市国府町・宝飯郡御津町附近、⑩豊川市牛久保町・豊橋市大村町および宝飯郡小坂井町附近、⑪一宮市大木・篠田・西原附近　⑫一宮町東上附近

八名郡　⑬一宮町大字金沢　⑭豊橋市賀茂町　⑮豊橋市下条東町・石巻本町　⑯豊橋市嵩山町　⑰豊橋市石巻町（金田附近）・石巻本町（神谷附近）　⑱豊橋市多米町

渥美郡　⑲豊橋市福岡町の一部、⑳田原町大字野田　㉑田原町大字神戸・加治　㉒渥美町大字畠附近

もとより矢作川・豊川等の洪水で失なわれたもの等々を考慮する必要はあるが、その規模を加味してみると国府の位置を反映してか、条里地割は概して東三河地方、なかんずく宝飯郡が卓越することが知られる。なお、本シリーズ第一回に掲載した尾張平野の条里地割の分布に比べると三河国は少なく、地形的制約のためか小規模なものが多いことが指摘されよう。

文献史料についてみると、管見の限りでは三河国の条里制について語るもの皆無に近く、条里地番法すら不明である。こうしたなかで行なわれた旧宝飯郡内での条里地割の発掘調査は、その形成過程を知る上で注目されるところであった。

条里地割の発掘調査

――為当条里（豊川市為当町堂前ほか）――

昭和61年、豊川市教育委員会により発掘調査が行なわれた。調査地は国府推定地（白鳥台地）の下、南側に広がる条里地割の一角で音羽川の左岸にあたる（写真）。

坪界を中心にトレンチを入れるものであったが、現水田面下0.4～0.8ｍのところで埋没する条里遺構（坪界の大畦、水路）がほぼ重複する位置で検出された。図示したものはそのうちの一つである。いわゆるトレンチ調査という制約もあってか、条里地割の形成年代を特定するにはいたらなかったが、検出された埋没条里は出土遺物からみて少なくとも平安時代末（11世紀末）を降らないものであることが知られた。畦の断面からみる限りではさらにさかのぼることは明らかである。そしてもう一つの重要な点としては、埋没条里と現地表面の条里地割とがほぼ重複しているという点である。このことは先にみた春日井市松河戸遺跡での所見と同じであり、地割の永続性の強さを物語るものといえよう。

このほか郡内では２箇所で発掘調査が行なわれているのであるが、ともに形成年代を解明するにいたってない。

以上、４回にわたり県下の条里地割について発掘調査の所見を中心に概観してきた。結論的にいえばその多くが推測の域を出ない点がほとんどで、断定的な結論でない点が多い。

日本史上で、全国的な地番制度の実施はこの条里制と「地租改正」政策の２回を数えるのみである。とくに前者は不徹底におわったとはいえ画一的な地割制度を伴なうものであった。全

国各地で「都市計画」等の地番・地割の変更を伴なう「土地開発」の進展をみる昨今、律令政府が推進した「古代」の土地制度である条里制を考えることはあながち無意味なことではなかろう。すべては今後の調査・研究に期したい。

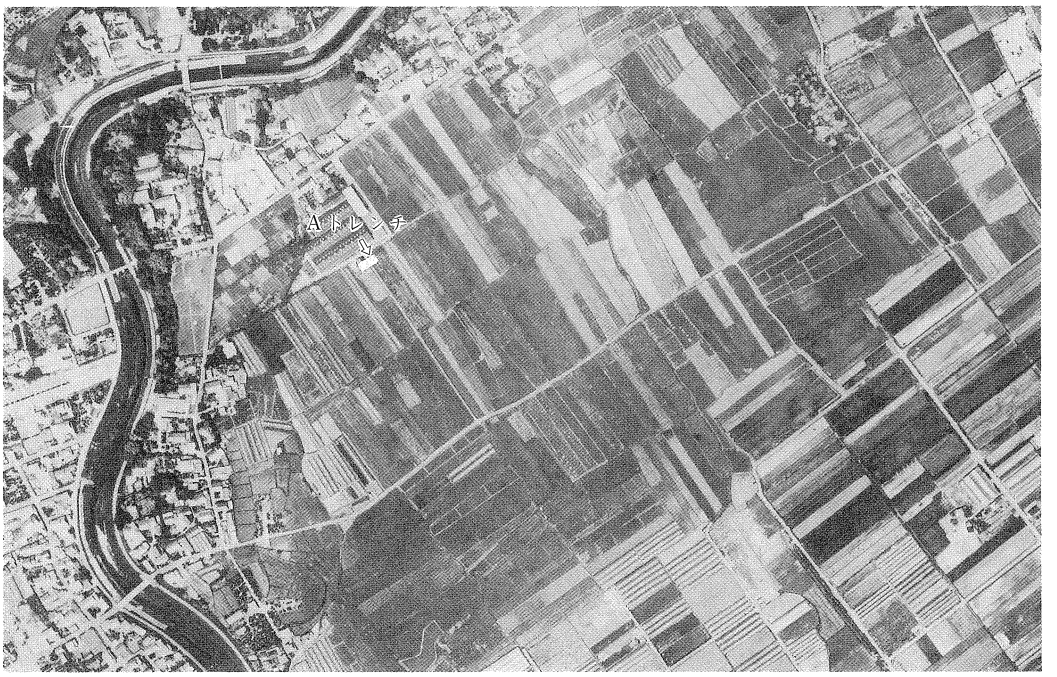
（北村　和宏）

参考文献

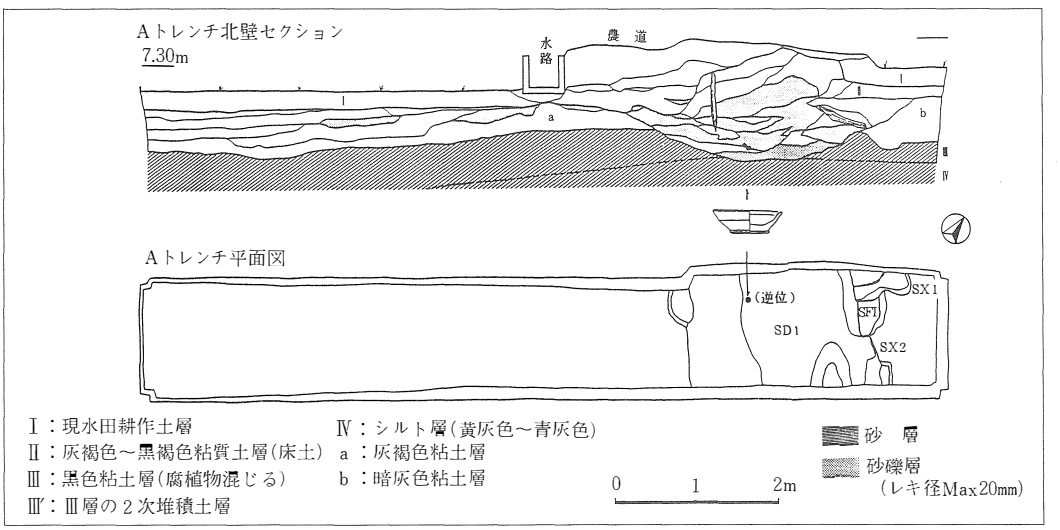
歌川　学　1979「三河国の条里制 —— 東三河地方における条里制の遺構」（弥永貞三・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版）

浅井和宏　1986「矢作川流域の条里制遺構調査報告」（『歴史研究』第２号　三河遠江の史的研究会

豊川市教育委員会　1987『為当条里遺跡発掘調査報告書』



第１図　為当条里遺跡と周辺の条里



第２図　Aトレンチ遺構図

市町村だより

茶臼山古墳

名古屋市教育委員会

名古屋市守山区小幡字北山に所在する茶臼山古墳は、丘陵先端部に立地する前方後円墳である。発掘調査は平成元年２月と７～９月の２回にわたって行われた。

茶臼山古墳は前方部を南西に向けた前方後円墳である。現状では後円部の西半から前方部の大半の墳丘が失われているが、全長約60ｍ程度に復原されるものと思われる。周囲には幅約６ｍの周濠が巡り、南東側のくびれ部では８ｍ×４ｍ程の長方形の造り出しがつくられていた。周濠内ではこの造り出し周辺に限って、まとまった量の須恵器が出土した。

主体部は後円部頂からやや南東寄りに位置し、くびれ部に向かってほぼ南へ開口する横穴式石室であった。玄室は約4.5×２ｍ、羨道は約５×１ｍを測る左片袖の石室である。天井石は全く失われており、玄室は奥壁をはじめ大部分の石材が抜かれ、玄門付近を除いて床面まで著しく攪乱されていた。玄門付近では礫床がのこされ

ており、６世紀中頃に位置づけられる須恵器などがみつかっている。一方、羨道部は比較的良好な残存状態であった。羨門付近でみつかった85×58×20cmの凝灰質砂岩の有孔の石材は、玄室内で破砕された状態でみつかった石棺材と同質のものであり、おそらく玄門部を閉塞する施設の一部であったと推測される。出土遺物としては、須恵器の他に土師器・金環・ガラス製小玉・金銅製辻金具や馬鈴などの馬具がある。

（木村　有作）

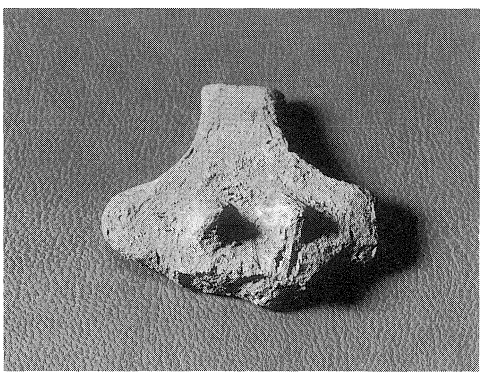
二股貝塚

知多市教育委員会

二股貝塚は、知多市新知字二股地内の標高40ｍの丘陵の北側斜面に立地している。昭和42年８月に、杉崎章氏（現・知多市民俗資料館長）を中心に学術調査が行われ、押型文土器を含む縄文時代早期後半における良好な遺物を包含する遺跡であることが確認されている。

今回の発掘は、同市が行う老人ホーム建設事業に伴う事前調査で、平成元年11月15日より、同２年１月20日にわたり実施したものである。

今回の調査の成果として、粕畑式土器に伴う土偶が出土したことがあげられる。土偶は腹部より下が欠けているが、板状にかたどられ、頭部、腕部と思われる突出部はあるが、眼、鼻、口などを表現したものは顔面部にはない。胸部には乳房が鋭く突き出しており、その基部と背部には入れ墨を表現したものであろうか、キザ



ミが確認できる。他に同じ時期の土偶は南知多町天神山遺跡にもあり、今後も検討していきたい。

上層の入海Ⅰ式・Ⅱ式は貝塚をなしているが、土偶の出土した粕畑式土器の時期には基盤直上で貝層はみられない。

（杉崎　章・青木　修）

資料紹介

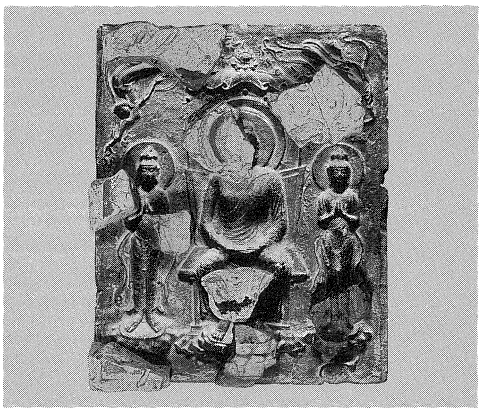
東畑廃寺跡出土の塼仏

稲沢市教育委員会

稲沢市稲島町石畑他所在の東畑廃寺跡は、市の北東部に位置し、古代尾張国における重要な水上交通路であった三宅川（現在は大江川）右岸の自然堤防上に立地する。寺の創建は出土の軒丸瓦の様式から７世紀中ごろまで遡り、一宮市長福寺廃寺、名古屋市中区元興寺と共に尾張地方最古の寺院と考えられる。尾張国府に最も近く、国府付属寺院とする可能性をもつ。

昨年９～10月に実施した第２次調査では、建物遺構は発見されず、瓦溜り数か所等が検出されたにとどまった。しかし、尾張国分寺と同型式の軒平瓦や写真の方形三尊塼仏の破片など注目すべき遺物が出土した。

塼仏は24点出土し、現寸２～８㎝、厚み２㎝前後の小破片で、焼成具合や裏面の製作技法の違いから数個体分と考えられる。いずれも奈良県橘寺や川原寺裏山遺跡出土品（宣字座に定印を結んで倚坐する如来形の中尊の左右に菩薩形の脇侍が立ち、三尊ともに茎ある蓮華座にのる。



川原寺裏山遺跡出土塼仏の実物大写真の上に東畑廃寺跡出土塼仏破片を置いたもの

中尊の背には宝屏と菩提樹、その上方に天蓋を表わし、その左右に花籠を持って散華する飛天を配する像形）同じタイプである。本例と川原寺例とはほぼ同じ寸法であるが、周囲の縁の有無、胎土や裏面の製作技法等の違いから、一回り大きい橘寺例が原型となり、本例と川原寺例と別々に笵が作られたと推測される。このタイプの塼仏は畿内（９か所）以外では初出土で、本寺院と畿内との結びつきが注目される。

（北條　献示）

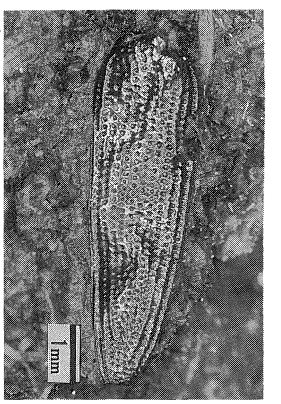
遺跡を語る昆虫―その３―

気候と昆虫

日本に19種が知られるネクイハムシは、湿地や池沼などに生息する小型の甲虫である。体長は10㎜にも満たないが、止水域に生息することから遺体は保存されやすく、遺跡から発見されることが多い。また、種によって分布する気候帯の異なるものも多く、古気候の推定に役立つ昆虫である。

これまで朝日遺跡では、縄文時代中期～後期にかけて堆積したと考えられる厚い泥炭層から、現在では北海道と本州の山地帯に分布し、長野県小谷村白馬岳を西・南限とするという＊アシボソネクイハムシ（*Donacia gracilipes*）が発見された。泥炭の^{14}C年代を測定した結果、4620±90y.B.P.などの値が得られ、この頃の気候が現在よりかなり冷涼であったことが推定された。

同じように町田遺跡でも同時期の堆積と思われる泥炭層が発達し、泥炭層中から寒冷域に生息する昆虫が見つかっている。これらの泥炭層は浅い谷地形を堆積するように堆積しており、今回の寒冷種の発見は、谷地形の形成など地形発達と気候変化との関連を考える上で興味深い資料となった。



アシボソネクイハムシ 右鞘翅

（伊藤　隆彦）

＊「アトラス日本のネクイハムシ」（野尻湖昆虫グループ：1985）による。

遺跡紹介

松河戸遺跡

春日井市

松河戸遺跡は、春日井市南西部の松河戸町に所在し、庄内川中流域の右岸に広がる沖積地に立地する。調査は環状2号線(国道302号線)建設工事に伴い、昭和62年度より実施されている。条里制遺構の検出を主目的として調査が行なわれてきたが、その下面において昨年度までに縄文時代から古墳時代にかけての遺構が確認されている。本年度C・D・E・F区の調査では、新たに縄文晩期後半～弥生前期の遺構と、中世の遺構を確認した。

これらの調査区の基本層序は、中・近世の水田耕土以下に灰色粘土層(中世遺物包含層)が広く堆積し、その下に黄灰色シルト層が存在する。この黄灰色シルト層は、東西方向に帯状に細長く伸びる自然堤防状の微高地と考えられる。そして、黄灰色シルト層上面が弥生時代前期、中世の遺構検出面である。

SD120は、この微高地を掘り込んだ幅約12m、深さ約1.8mの浅谷状の地形をなす。その基本層序は大きく4層に分けられる。SD120下層(Ⅳ層)の木本質泥炭層では縄文時代晩期後半の土器とともに、丸木弓2点、木製品、打製石斧が出土し、上層(Ⅰ～Ⅲ層)では弥生時代前期後半の土器とともに石剣が出土した。弥生時代前期の遺構は、SD120上層と繋がり円弧状に巡る溝(SD05)と土坑3基を検出した。後世の耕作等によって削平を受け、その全容は不明であるが、SD120とSD05に囲まれた地区に土坑が存在することより、SD05は集落を囲む環濠と考えられる。出土遺物は、遠賀川系の壺・甕、条痕文系の壺・深鉢、渦巻文土器、変形工字文土器が見られる。

89D区の調査の結果、微高地の下に広がる粘土層中に縄文時代後期～晩期間に降灰したと思われる火山灰が確認された。このことより、微高地は縄文時代晩期以後に2mを超す堆積により形成され、浅谷はこの微高地を掘り込んで少なくとも晩期後半には形成されたものと考えられる。このような縄文時代晩期における「庄内川の氾濫」は、この近辺に稲作に適した自然環境を作り出したと考えられる。庄内川流域の弥生時代前期の遺跡には、名古屋市北区西志賀遺跡、同市西区月縄手遺跡などがあるが、本例は、それらより上流に位置するもので、庄内川中流域の弥生時代前期の一端を解明する資料となるであろう。

中世の遺構も弥生時代前期と同じ微高地上に立地し、基本的にSD120の方向性を踏襲している。遺構は微高地全域に広がり、極めて密度が濃い。一方、微高地の北及び南に広がる低湿地にはまったく遺構が見られず、生活域とそれ以外を完全に区画している。この点から、低湿地は水田であった可能性が高い。

中世の遺構のうち、2条の溝に焦点をあててみたい。SD104は階段状に屈曲する溝で、東西及び南北方向を保っている。SD105はSD104の西に平行する溝である。その他の遺構はこの2条の溝を境にして、西は微高地に沿い、東は地軸に沿うという方向性の違いを持っている。つまり、SD104は性格の違う両地域を区画し、SD105はSD104の外郭的役割を持つものと思われる。SD105Ⅲ層から完形の椀・Ⅲ類が出土しており、この溝の特殊性を示唆している。

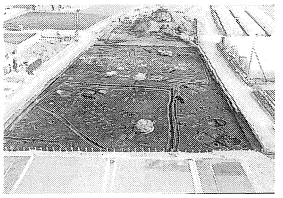
現段階において、異なる方向性を持つ東西両地域の性格解明が最重要課題である。

(後藤浩一・岡本直久)

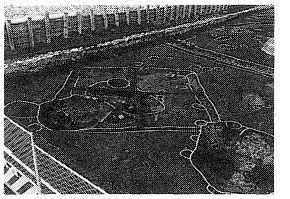
SD105遺物出土状況

発掘ニュース

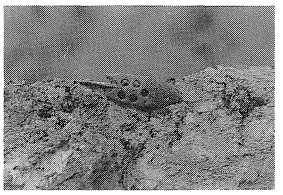
麻生田大橋遺跡　豊川市


C区全景（西から）

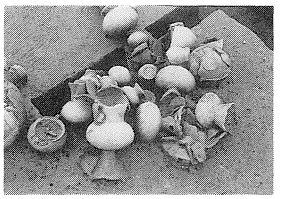
本年度前半のA・B区に引き続きC区（1800㎡）を調査した。縄文時代晩期後半の馬見塚・樫王式の土器棺墓3基、古墳時代後期（7世紀代）の竪穴住居3軒、その他、中・近世の掘立柱建物3棟、溝状遺構10条、土坑多数を検出した。


SB03竪穴住居

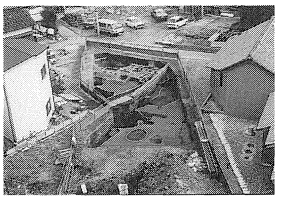
岡島遺跡　西尾市


銅鏃出土状態

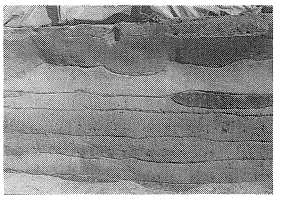
A区下面では、弥生時代中期の土器棺墓・方形周溝墓・溝・土坑等を検出した。数ヶ所に集積土器群も確認され、特に弥生時代後期に属する壺を主体とした一群は、「据え置かれた」ような状況を呈し注目される。また、弥生時代後期末の土坑中から銅鏃が出土した。


SX1001土器出土状態

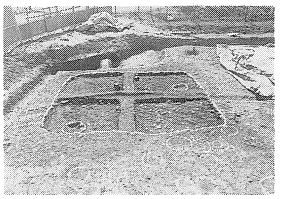
清水遺跡　西尾市


C区全景

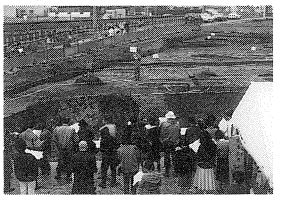
碧海台地上のC区、沖積地のA・B区を調査中である。A区の包含層中より古墳時代と平安時代前半の製塩土器が、B区の碧海台地の崖下の包含量から縄文時代前期の土器が出土した。C区では、16世紀～17世紀前半の貝殻の廃棄と土取りの大形の土坑を検出した。


A区土層断面

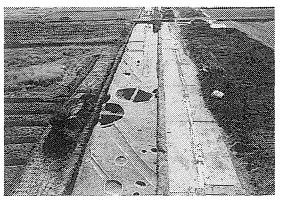
勝川遺跡　春日井市


SB19竪穴住居

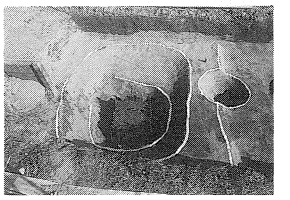
89C区は、弥生時代の木製農具の製造・保存跡が確認された62F区の北側段丘上に位置する。東の63B区から続く弥生時代中期の溝は南へ曲り、段丘崖に達した。弥生時代中・後期の竪穴住居13軒、奈良時代の竪穴住居4軒を確認した。


現地説明会風景

土田遺跡　清洲町


B区近景

今回は環状2号線をはさんで北にA区、南にB・C区併せて長さ約270mを幅約3.5mにわたって調査した。B区では中世の井戸5基、東西に走る溝十数条を確認した。また、古墳時代初頭の溝の一部を検出したが、これは古墳になる可能性もある。


B区中世の井戸

センター日誌

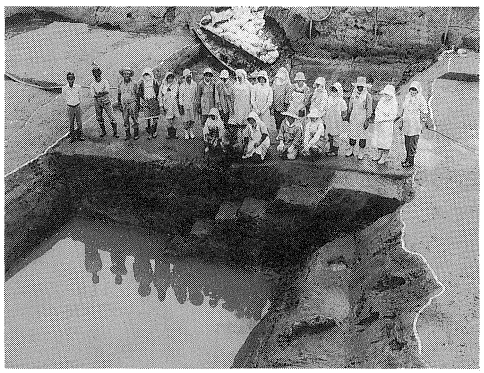
埋蔵文化財専門研修会

平成２年１月25日(木)・26日(金)
参加者　50名

現地説明会

平成元年12月16日(土)
清洲城下町遺跡　清洲町
屋敷地を巡る溝、井戸、
天正地震による地割れなど
参加者　約100名

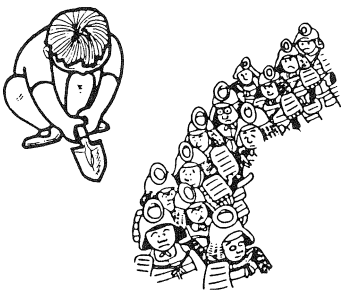
平成２年１月20日(土)
岩倉城遺跡　岩倉市
幅20mの堀、中世の井戸、
瀬戸・美濃産陶器など
参加者　約350名



平成２年１月27日(土)
松河戸遺跡　春日井市
縄文時代晩期丸木弓、弥生時代前期の溝、
近世条里制水田跡など
参加者　約600名

来訪者

89・10・2　南京市博物館副館長他２名
・5　三重県埋蔵文化財センター　２名
・18　国体準備室事務局長　野田史朗氏
・23　弥富町桜小学校ＰＴＡ　25名
・24　愛知県内水面漁場管理委員会　20名
11・13　尾張・知多・海部教育事務所長
・22　武豊町教育委員会　14名
・29　一宮市農業委員　33名
12・7　愛知教育大学　河村善也氏
・14　海部津島小学校長会　50名
90・1・16　前橋市教育委員会　駒倉秀一氏他1名
奈良国立文化財研究所　深沢芳樹氏
・19　尾張教育事務所
中島地区社教主事会　15名
・22　名古屋大学　中井信之氏
2・9　額田町教育委員会　宇野教治氏他1名
・13　長野県埋蔵文化財センター
中沢道彦氏他２名
神奈川県立埋蔵文化財センター
小島真人氏他１名
・14　名古屋市博物館　安達厚三氏他１名



埋蔵文化財愛知 No. 20

発　行　平成２年３月
編　集　(財)愛知県埋蔵文化財センター
〒498　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802番24
ＴＥＬ　0567－67－4161
印　刷　株式会社　クイックス